

平成 20 年度 グローバル COE プログラム
「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」
次世代研究イニシアティブ 成果報告書

1. 課題名、調査地、氏名

課題名：「ローカルな潜在知としての災害の記憶—トルコ・台湾・インドネシアの地域間比較から—」

調査地：トルコ、台湾、インドネシア

氏名（所属）：木村周平（京都大学東南アジア研究所）、阪本真由美（京都大学大学院情報学研究科）、松多信尚（台湾大学地質科学系）、松岡格（東京大学大学院総合文化研究科）

2. 研究の目的

問題の所在

近年、防災実務の領域においては、災害の経験あるいは記憶を共有・活用することに、大きな注目が集まっている。これは「記憶の語り継ぎ」というような具体的な形で議論されることが多いが、ここには 2 つの点で 1995 年の阪神・淡路大震災のつよい影響がある。ひとつには、この地震において、国や行政による災害対応のみによる対応の困難さと、近隣住民あるいはボランティアの果たす役割の重要性が明らかになったことである。これを受けて、防災行政では自主防災組織の形成の促進など、住民（コミュニティ）による災害対応（共助）の推進が図られるようになってきている。もうひとつは、この地震を契機に、記憶をめぐる様々な動きが現われたことである。たとえば「阪神淡路大震災の経験と教訓を後世に継承し、国内外の災害による被害の軽減に貢献する」¹ことを謳う「人と防災未来センター」の設立、「語り部」の活動、あるいはよりローカルなレベルでの慰霊碑の設置や被災体験の記録など、それまでの災害とはけた違いに、記憶を維持・保存する必要性が主張され、また実践されているのである。

こうした、住民による積極的な活動やローカルな知識（あるいは経験・記憶など）に目を向ける傾向は、世界的にも広まりつつある。そこではローカルな知識や技術は「災害文化（disaster culture）」などと呼ばれ、研究や開発プロジェクトにおけるキーワードとなっており、1990 年代の国連「国際防災の 10 年」をついで、2005 年に開催された兵庫会議で採択された兵庫行動枠組でも、「安全性と回復力の文化（a culture of safety and resilience）」の醸成は主要なテーマの一つとされている。

しかし、そこにおいて語られる「文化」や「記憶」は、きわめて曖昧に議論されるのみ

¹ 「人と防災未来センター」ウェブサイトより (<http://www.dri.ne.jp>、2008 年 11 月 19 日閲覧)。

である。「災害の記憶」とは何か、どのような形態を取るのか、現地調査にもとづいて明らかにする必要がある。

以上のような問題意識のもと、本プロジェクトは、大きな自然災害の後、数～10年のうちに、(1)人びとは災害の何を記憶しているのか、また(2)災害の記憶が外在化するとして、それはどのような形態をとるのか、について、調査・研究を行った。

本プロジェクトの特徴

本プロジェクトの特徴は次の二点である。

ひとつめは、バックグラウンドの異なる4人の研究者による共同研究だということである。それぞれの分野のアプローチを下敷きにしつつ、議論を通じて共通の枠組みを構築するという作業は、災害という問題の「多次元性」[ホフマン・オリヴァー＝スミス 2004]を考えても、きわめて重要な意味をもつ。

ふたつめは、三つの社会の経験を比較検討することである。それによって、地域的に異なる「災害の記憶」のあり方、あるいはそれが忘却されないような仕組みを考察することが可能になる。具体的な調査対象地域は、トルコ、台湾、インドネシアであり、いずれも突発的に発生した巨大な災害の被災地である。トルコおよび台湾では、巨大な地震災害（コジャエリ地震と集集地震）の発生から来年でちょうど10年になる。同じ時期に起きた災害が、10年を経てどのように語られるのか、教訓として何がどのような形で（語りから記念碑、あるいは社会的制度など）残っているのか、それが地域的な状況とどう関わっているのかを捉えることは、地域研究という文脈でもきわめて意義のあることだと考えられる。加えてインドネシアにおいて2004年のアチェにおけるインド洋津波災害、さらに2005年の中部ジャワ地震の被災地を調査することで、地域間比較がより深められると考える。

なお、トルコの調査を木村が、インドネシアの調査を阪本が、台湾の調査を松多と松岡が担当した。調査に先立ち、2008年7月に事前の打ち合わせを神戸市の「人と防災未来センター」で行い、また調査の成果についての検討を2009年2月に京都大学東南アジア研究所において行った。

調査項目

本調査においては、まず現状把握のために、以下のような枠組みを設定した。

1) その社会（地域）の災害に対する意識や考え方、その変化を探る

これに関しては、被災者の語る記憶をデータとし、被災の中心地において、10人以上に対し、それぞれ30分以上の聞き取りを行うことを目指した。また同時に、ジェンダー、年齢、民族、教育、宗教、職業などに極端な偏りがないように気をつけつつ、現地の状況や調査遂行の可能性などに柔軟に対応することを心がけた。加えて、一般住民だけでなく、可能なら村長・町長のような立場にいる（いた）人にも聞いてみることにした。

内容については、(1)地震（津波）の時、何を体験したのか、(2)復興過程において直

面した問題について、(3) 記憶について (いつ、災害のことを思い出すか、災害の何を思い出すか、誰かといまも災害のことについて話したりするか) (4) 現在の備え (次の災害に対してはどう対応するか)、(5) 記念式典などへの参加、(6) 人々はもう災害のことを忘却してしまったのか、そうだとすればそれはいつ頃からですか、なぜそうになったと思うか、などをあらかじめ項目として設定した。

2) その社会に特徴的な、記憶の現れ方、維持のされ方、忘却の仕方を探る

これに関しては、ミュージアム、記念行事、碑などの、カタチのあるものをデータとする。これらについては、設立の経緯、設立 (や設立への反対) に関わるアクターは誰か、展示内容、全体としてのメッセージなどもできる限り調査した。加えて、映画、書籍等、公的な記憶や、防災教育の有無なども対象とした。

3. 研究の内容と成果

(調査内容はそれぞれ論文あるいはワーキングペーパーとして投稿予定であるため、以下では概要のみ記述する)

台湾・921 地震

台湾集集地震は 1999 年 9 月 21 日午前 1 時 47 分、台湾中部集集付近を震源とする USGS マグニチュード 7.6 の地震である。この地震については、台湾大学の松多信尚と東京大学の松岡格が担当した。今回の調査は、文献調査と聞き取り調査の 2 つに大きく分かれるが、前者は 2008 年 7 月からはじまり、2009 年の 2 月まで続いている。後者の聞き取り調査は、二回に分けて行った。1 回目の調査地は、8 月 21 日・22 日は南投縣日月潭、8 月 25 日・26 日は台中縣東勢鎮であり、2 回目は東勢鎮に絞って、12 月 27 日から 12 月 30 日まで聞き取り調査を行った。日月潭とは湖の名称で、その周りに台湾原住民のうちサオ族が暮らす地方である。日本統治時代に人口的に湖を拡張し、戦後は観光地として有名になったところである。東勢鎮は、山脚に位置しており、客家の農村から発展してきた街であるが、この鎮だけで 357 人の死者を出しており、人口比率から言っても、最も被害が大きかった鎮と言える。聞き取り調査は、研究代表者である木村周平の作成した「調査項目」になるべくそった形で行い、聞き取り対象者の時間などによって調整した。質問は、主に中国語で松岡が行い、現場で訳しながら、松多が気になった点に関して追加の質問をする、というような形で行った。聞き取りに答えてくれた方は 31 名で、そのうち 8 名が女性、そのうち 5 人が日月潭で、26 名が東勢での聞き取りを行った。

震災経験・記憶の聞き取りのほかに、この地震の特徴ともいえる、充実した博物館および地震遺跡博物館においても、調査を行っている (博物館は国立が一館、省立が 1 館、計画中の県立が 1 館有り、他に国家公園が 3 箇所、他に多数地方自治体が整備した地震公園が存在する)。このうち国立のものは被害地域中部に位置する霧峰地区に車籠埔地震断層の

直上に建設され、正式名称は「921 地震教育園區」という。この博物館は地域住民との協約で大々的に観光の宣伝はしていないが、小中学校の修学見学旅行や国内観光拠点だけではなく、外国団体の視察も多くあり、2005 年の開園以来 3 年間の入場者数は 150 万人を超えており、地震の記憶を語り継ぐ上で大きな役割をしている。

博物館の駐車場入り口は川を挟んで博物館と対峙し、そこから橋を渡って入場する。博物館は 5 棟の展示館と 4 棟の破損した建物と保存された断層線で主に構成されている。4 棟の破損した建物は十分な補強工事がなされ、建物を中や上から観察できるように歩道橋を設置するなど参観通路が整備され、地震のすさまじさを肌で感じられるような工夫が随所になされている。5 棟の新館は車籠埔断層保存館、地震工程教育館（地震工学）、影像館、防災教育館、重建（復興）記録館である。断層保存館は 2004 年の台湾建築賞を受賞した。館内参観の動線には屋外の断層と平行に断層の位置を示す地図と写真があり、これらとトレンチ断面は直行し断層を立体的にイメージするように配置されている。地震工程教育館は小さいブースに分けられ、多くのパネルや模型が備えられ、簡単な小実験などを通じ耐震構造や地盤についての理解を深めるよう工夫されている。学芸員が多くいるのも特徴である。この博物館の運営機関である国立自然史博物館も学芸員による小実験室が多数有ることから同じ思想によると思われる。学芸員が教訓じみたことを話すか体験を話すわけではなく、語り部とは異なる。影像館はドキュメンタリータッチで地震を疑似再現しており、展示だけでなく疑似体験影像施設もある。防災教育館は防災や地震後の救済を中心に、災後の救済体験施設などがあるほか、地震観測の歴史から台湾の自然と生物に至るまで展示している。展示館出口は「希望之廊」と名付けられた外側に水が流れるガラス張りのエレベータを利用し、暗闇の館内から「洗礼之塔」と呼ばれる明るい館外に出ることで復興をイメージさせるなど館内は芸術性を取り入れた工夫がなされている。重建記録館は各地域でどのように復興されたかという展示がなされ、模型や文献といった資料も展示している。その他にも教育区内には、壊れた水のないプールに 9、2、1 の大きな鉄製の噴水を配置する展示や、921 集集地震時の地震計の記録が橋の床に大きく刻んだ展示、台湾島の形をイメージしたベンチなど多くのモニュメントが存在している。

また、この博物館の設立の経緯を追ってみると、震災直後は教育や記憶（記録）が主なテーマであったが徐々に復興やら観光などの要素が加味されていったことも見えてきた。発案当初には断層の保存と地震の記録が主目的であり、教育的な断層保存館と影像館が設立されたのに対し、地震 5 年後に計画された陳列館案では復興と再生に主眼が置かれる。特に特筆すべき点は、当初の目的である復興や再生の他に例えば台湾の自然と環境問題といった台湾共同体としての展示が増える。リニューアル前の影像館も厳粛な空気が漂う展示だけだったのが、リニューアル後は体験や地域の再生と言った展示が追加され、台湾社会の一体感や再構築が地震の記憶の保存の中で重要なテーマであったことがうかがえる。

インドネシア・インド洋津波

2004年12月26日に、バンダ・アチェ南東250キロを震源とするマグニチュード9.1の地震が発生した。地震発生から約30分後に、この地震による津波が、インドネシア・スマトラ島の北端に位置するナングロ・アチェ・ダルサラーム州の州都バンダ・アチェを襲った。被災前のバンダ・アチェは人口約26万人の中規模都市であったが、この津波による死者・行方不明者は71474人にのぼり、人口の実に27%を失う大惨事となった。

調査は京都大学大学院の阪本真由美が対応し、インド洋津波災害に直面した人の記憶を聞き取り調査から把握することにつとめた。聞き取り調査においては、インタビューされる人が、自分の考える枠組みにおいて語るができるため、内容を深く掘り下げるとともに、対象となる人々の考えをより理解することができることから、回答者の自由な判断で語りを展開してもらい、非構造的インタビューを行うこととした。インタビューにおいては、以下の二点に留意した。

まず、災害時の記憶については、時間が基軸となることから、地震や津波が発生した際には何をしていたのかを起点として、その後、どのような行動をとったのかを、地震発生時、津波発生時、津波来襲時、津波が引いた後、津波から数日後というように時間軸に沿って話をしてもらった。

調査対象者は、災害前から地域に居住しており、かつ、津波により人的・物的被害を被った人とした。被災地では、津波災害後、住宅の再建が進められているが、死亡あるいは行方不明となった被災者の遺族が居住しているケースも多いため、調査対象地域の住宅を訪問し、被災前から居住しているか否かを確認したうえでインタビューを実施した。調査対象地域は、津波により人口の7割を失ったクタラジャ地区ムルドゥアティとした。

調査は、インドネシア人の調査員（国立ジャクアラ大学の学生）と調査者との2名で行い、基本的にインドネシア人調査員が、すべてのインタビューを回答者の使う言葉に応じインドネシア語もしくはアチェ語で行った。調査回答者は図のとおりである（表2.3）。なるべく男女、異なる年齢層から回答を得られるよう留意した。バンダ・アチェにおける調査は、2008年8月6日～14日にかけて行った。

またこの津波災害については、この災害を契機に災害復興調整機関とした設置されたアチェ・ニース復旧・復興庁（Badan Rehabilitasi dan Rekonstruksi, BRR）により、災害博物館の建設が進められている。2007年には、博物館のデザイン・コンクールが行われ、その優勝作品のデザインに基づき市中心部に建設されている。博物館は、避難経路が設けられており、避難場所としても活用できるようになっている。加えて国立ジャクアラ大学は、津波にて全壊したままの形で保存されているムラクサ病院の建物に隣接して津波避難場所を兼ね備えた津波防災センターを建設しており、この中に兵庫県から提供された義援金を活用した、災害資料館が新たに設置される予定である。災害資料館には、津波災害及び災害復興過程の資料が保存される予定であり、そのためのデジタル・アーカイブ作成が進められている。また、その一環として、被災者の体験談を収録した映像と、その内容をまとめ

た本が製作されている。調査時には、一般市民による体験談を収録した映像と本が完成していた。今後、行政関係者、教育関係者などの資料が順次作成される予定である。また日本政府の援助をはじめ、各国の支援により様々な記念碑が建設されている。

トルコ・マルマラ地震

本調査の対象となった災害は、現地時間の 1999 年 8 月 17 日午前 3 時 2 分にトルコ北西部で発生したマグニチュード 7.5 の地震であり、被災地の名前をとって「コジャエリ (Kocaeli) 地震」、「マルマラ (Marmara) 地震」、あるいは「ギョルジュク (Gölcük) 地震」などと呼ばれるものである(日にちの「8 月 17 日 Onyedi Ağustos」だけでこの災害に言及することもある)。震源となったのは、トルコを東西に横断する、北アナトリア断層と呼ばれる長大な断層である。地震は約 45 秒継続し、コジャエリ県で約 1 万人、トルコ全体で 1 万 7 千人の死者が出たとされる。被害を大きくした要因は近年の人口増に従って建設された、十分に耐震基準を満たしていない中・高層アパート群だと言われている。

調査は木村周平が担当した。まず 4 月に他のメンバーとメールにて打ち合わせを行い、その上で 7 月に、メンバー全員で集まって打ち合わせを行った。その後、メールにて質問項目について確認したのち、8 月 25 日から 9 月 5 日までトルコ共和国コジャエリ (Kocaeli) 県ギョルジュク (Gölcük) 市に滞在し、調査を行った。ギョルジュク市を対象としたのは、そこが震源地に最も近く、きわめて大きな被害を出した町だからである。とはいえ、記念式典や博物館に関しては、市の外に出て調査を行った。調査は被災者に対するインタビューを中心とし、それを補足するために様々な資料の収集を行った。ギョルジュク市の市民のほとんどが調査対象者となるが、そこではスノーボール・サンプリングを行った。ギョルジュク市を訪問する前に数名のキーパーソンを紹介してもらっていたので、その人たちから始め、順にインタビューを行った。しかし、そのように進めると一般的な市民の声が聞きづらいと感じ、町中でも可能な相手に対してインタビューを行うことにした。拠点となったのは筆者が宿泊した「教員宿舎」と、復興住宅近くの、ある商店である。これらは事前に決めていたことではなく、偏りがありうる。またインタビューにおいては、あらかじめ用意していた質問項目をもとに、それぞれ 15 分から 1 時間程度、聞き取りを行った。インタビューはその場でノートをとり、夜に宿舎で清書する、という仕方で記録したが、被調査者の許可が得られた場合にはインタビューを録音した。

加えて、地震博物館と記念式典についても調査を行った。これらについては GCOE ワーキングペーパー (no. 19) 『トルコにおける地震の記憶の活用をめぐる』に詳述しているので、ここでは省略する。

調査結果

本調査を通じて明らかになった点は、①記憶の語られ方の傾向性と、②記憶保存活動の相違、として整理できる(表 1、また詳しい考察は『京都大学防災研究所年報』に投稿中で

ある)。

本調査からの示唆は、災害の記憶の継承には地域差がみられるということ、災害の記憶を防災に利用するのであれば、災害がどのように捉えられているかを理解したうえで、その地域の特性をふまえたうえで被災した記憶を風化させずに、語り継ぐ仕組みを構築することである。

表 1 トルコ・台湾・インドネシア調査結果

	Turkey	Taiwan	Indonesia
Name of Hazard	Kocaeli EQ	Chi-chi EQ	Central Java EQ
Date of impact	1999.8.17	1999.9.21	2006.5.27
Damage	Death toll: 17,000	Death Toll: 2,400	Death toll: 5,800
Research Area	Gölcük (Kocaeli)	Nantou, Taichung	Yogyakarta
Num. of Interviewee	25 (M:19 F: 6)	14 (M:11 F:3)	15(M9 F6)
Memory of impact	Clear	Vague	Clear
M.of reconstruction	Vague	Clear	Vague
Other memories related with the disaster	precursor	Ethnic movement, local voluntary team	Tsunami Panic Volcanic Activity of Mt. Merapi
Talk to each other	yes	Yes	No
Talk to children	no	no	No
Earthquake is	Human errors Not to be forgot	Bad memory To be forgot	Fatality Change of Natural Balance
Lessons	EQ-resistant buildings	How to escape, fire drill, EQ-resistant building	Building Fragility Respect to tradition (ritual ceremony)
Commemoration	+	+	-
Monuments	Several	Many	No
Museum	Few	Few	No
Other forms of memory	booklets, CDs (music and movie), gravestone	booklets, DVDs, gravestone	broken houses booklets, DVDs Wayang (shadow theater) Dome housing
Bearers of reconstruction	state, local municipality	local leaders, NGOs, religious organization, local municipality, state	Local municipality, volunteers international assistance